

再建主義ウォッチング掲示板 過去ログ

2004年3月26日(No.62)～4月13日 (No.127)

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」(Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy) に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

[再建主義ウォッチング掲示板 現行ログ](#)

□127 反論への反論 (5)

[山谷](#) - 2004/04/13 15:17 -

再建主義者、曰く、

>この点について尋ねても尋ねてもなしのつぶて。もしくは、これまでの誤った説明を繰り返すだけ。「ゲネア」を「民族」と解釈することなど絶対にできないことをこれまで口がすっぱくなるほど繰り返してきたのにまだ言いつづける。

もはや、再建主義者は、「なしのつぶて」だとは言えないでしょう。わたしは少なくとも、「五つのつぶて」を投げ返しました。キッテル、リッデル、ゲゼニウス、ディートリッシュ、シュヴァイツァーです。

問題点は、明確です。

バビロンの「永久廃墟預言」は、誇張法なのか誇張法ではないのか。

キッテルとリッデルの示すゲネアの「血族・家族・人種・子孫・罪と連帯する民の全体」という意味を、認めるのか認めないのか。

マタイ24章34節の「みな」に、29節から31節の「再臨」が含まれるのか含まれないのか。

これらについて説得的な論証が提示されることを、期待いたします。

□126 反論への反論 (4)

[山谷](#) - 2004/04/12 21:18 -

再建主義者、曰く、

>「マタイ24章の大患難預言は未来に起こる」というプレ・ミレの中心的な教えは、イエスの「これらが起こらない限り、このゲネア(時代、世代、30-33年)は過ぎ去らない」という「時代限定語句」によって徹底して粉碎される。

「徹底して粉碎される」とは・・・

しかし、何を根拠に、そこまで断定的な釈義を主張しているのでしょうか？ 少なくとも、キッテルやリッデルやゲゼニウスを全然参照していないことは、確かなようですが。

そうすると、何ら学問的根拠がないのに、ただ「粉碎された！」と叫んでいるだけなのだろうか。

そもそも、再建主義は、自然と恩寵を直接対決させる図式に依拠しているために、シェー

ファーが指摘した「理性からの逃走」へと至ってしまう危険性が大きいわけです。合理的根拠がないのに「粉碎した！」と叫ぶのは、確かに、思想の自由ではありますが、そのような根拠薄弱な主義主張によって「公開処刑」を実現しようとしているのですから、まったく、恐ろしいものです。

ところで、主が「これらのことが**みな**起こるまでは」と言っておられるわけですが、この「みな」には、どの範囲のテキストが含まれるのでしょうか。「みな」と言われている34節の直前には、次のような終末論的描写が提示されています。すなわち、

その苦難の日々の後、たちまち
太陽は暗くなり
月は光を放たず
星は空から落ち
天体は揺り動かされる
そのとき、人の子の徴が天に現われる。
そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、
人の子が大いなる力と栄光を帯びて
天の雲に乗って来るのを見る。
人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。
天使たちは、天の果てから果てまで、
彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。

上記が「みな」に含まれているのであれば、紀元70年のエルサレム陥落の後に「たちまち」（29節）そうしたことが起きたはずなのです。が、実際には、そうなりませんでした。「たちまち」と言われているのに、すでに、1900年以上が経過しているわけです。

こうなりますと、またもや、主のお言葉が地に落ちてしまうわけですが、再建主義者なら、「いや、字義通りに解釈すべきではない。それは、ヘブル語特有の誇張法なのだ」と言い張るのでありましょう。

しかし、果たして、主は、本当に誇張法を用いて、話しをされたのだろうか？ 本当に主は、太陽が暗くなり、月が光を失い、御自分が大いなる栄光を帯びて、光る雲に乗って再臨されると、確信しておられたのではないのだろうか？
それとも「そんな絵空ごとが文字通り起きるわけがないが、文学的表現のあやとして、そう言うておこう」と思われたのに過ぎないのか？

わたしは、どうも、再建主義者の聖書観というものが、聖書を尊重するどころか、聖書をけなすもののようにはしか思えないのです。

「確かに、初代教会は、それを事実として信じていたが、現代人には通用しないのだから、実存主義的に解釈しよう」と言ったブルトマンの方が、まだしも聖書を尊重しているように思えてしまうのは、わたしだけでしょか？

☐ 125 なるほど

内なる人 - 2004/04/12 20:44 -

時代背景によってポスト・ミレカプレ・ミレになっちゃうんですね。

124 反論への反論 (3)

山谷 - 2004/04/12 20:44 -

3. 後千年期再臨説問題

確かに、長老教会大会決議が「断罪」したのは、セオノミーであって、ポストミレニアリズムではありませんでした。再建主義キリスト教の本質は、しかし、「ポストミレニアリズムとセオノミー」の組み合わせなのであって、再建主義においては、セオノミーなしのポストミレニアリズムはあり得ないし、ポストミレニアリズムなしのセオノミーもまた、あり得ないのであります。そうであればこそ、「ポストミレニアリズム+非セオノミー」のウェストミンスター信条を改訂せよと要求しているわけですし、また、「プレミレニアリズム+セオノミー」のパット・ロバートソンやピーター・ワグナーを「偽者」として批判しているわけです。

ところで、前千年期再臨説は、第二世紀の小アジアにおいて熱狂的に支持されていた信仰的立場であり、当時のキリスト者は、黙示録に示された大バビロンは「ローマ」、獣は「皇帝ネロの再来」、大バビロンの滅亡は「ローマ帝国の滅亡」と固く信じていたのです。

しかし、おおかたのキリスト者の予想に反して、ローマ帝国はキリスト教を国教として採用する結果になりました。そこで、従来の「小アジア系統の釈義」とは全く別の方法で黙示録を解釈しなければならない必要性が生じて来たのです。

この必要に応えたのが、エウセビオスの『教会史』です。彼は、ローマ皇帝を「神の代理人」「地上における救世主の似姿」としてほめたたえ、かつ、ローマ帝国を神の国と同一視しました。さらに、「ローマ帝国とローマ皇帝を敵視する前千年期再臨説」を「ユダヤ人の迷信・迷妄」として、厳しく批判・攻撃しました。このために、前千年期再臨説を採用していた第二世紀の主教パピアスなどは、それこそエウセビオスによって「ボロクソ」の書かれ方をされたわけです。

ところが、第五世紀に入って、蛮族の侵入により、ローマ帝国が滅亡するという事態が展開し、エウセビオス流の「ローマ帝国=神の国」というパラダイム枠も成立不能になってしまいました。ふたたび新たな黙示録の解釈法の必要性が求められたのです。これに応えたのが、ヒッポの主教アウグスティヌスで、ここに至って「地上の国」と「神の国」が分離され、その間を旅する「教会」が存在するという、中世的世界観が確立されるに至ったのです。

この中世的世界観の終わりに立っていたカルヴァンもルターも、当然のことながら、前千年期王国は「ユダヤ人の迷信」であるとみなし、「地上の国」と「神の国」の同一化を追及する再洗礼派の武装革命を「異端」として、断罪したのでした。

しかし、19世紀の後半になって、アルバート・シュヴァイツァーが新約聖書神学における「徹底的終末論」を発見し、新約聖書の終末論的性格を明らかにしました。C・H・ドッドがこれに対して「現在の終末論」を唱えて対抗したのですが、この議論を踏まえて、前世紀初頭にルドルフ・ブルトマンが様式史批評の手法によって、「新約聖書の終末論的性格」を学問的に解明するに至りました。

もちろん、ブルトマンは、「新約の終末論は、現代人には通じないから、非神話化しなければならない」と主張した点が、大いなる誤りであったわけです。これに対して、オスカー・クルマンは、非神話化に異を唱え、新約聖書の終末論は「現在わたしたちが生きている歴史と同一線上で展開されている救済の歴史にほかならない」ことを『キリストと時』によって明らかにして、非神話化論を超克したのでした。

ですから、現代の神学では、「新約聖書とは終末論的である」のです。そこで、様式史批評の手法で行けば、ローカルな初代教会の信仰が、原始的信仰箇条として新約文書に反映されてい

るのですから、「小アジアの初代教会の信仰である『前千年期再臨説』が、黙示録に反映されている」と見るのが、当然なのです。

つまり、「生活の座」で聖書を読むなら、黙示録に明示されているのは、前千年期再臨説ということになるのです。

これは、前千年期再臨論者が、そう読みたいから、勝手にテキストに読み込んでいる、ということではなく、古典語・古代語・古代文化・古代思想・文献批評に精通した専門の学者による、職人技的に緻密な聖書釈義の結果として、明らかにされたことなのです。

これに対して、ポストミレニアリズム及びアミレニアリズムは、「ローマ帝国を神の国と同一視し、ローマ皇帝を神の代理人とみなしたエウセビオスの解釈学的誤り」が、「アウグスティヌスの『神の国』というメスによって外科手術を施され、歴史的時間と救済史的時間に切り離されてしまった」という、二重の誤謬の産物なのです。

□ 121 反論への反論（2）

[山谷](#) - 2004/04/12 20:30 -

2. ゲネア問題

ゲネアの釈義の問題は、キッテル、リッデル・スコット、ゲゼニウス、ディートリッシュ、エドゥアルド・シュヴァイツァーを示したことによって、解決済みだと思っていましたが？

パーシャルプレテリスト再建主義によれば、「イラク全土に人間が居住しているのだから、バビロンの『永久廃墟預言』は、ヘブル語特有の誇張法なのだ」ということです。だから、ゲネアにまつわる新約聖書の「いまだかつてなく、今後も二度とないような艱難」という用法もまた、誇張法なのだ、というのです。

この論理を崩すのは、簡単なことで、そもそも、再建主義者による「バビロン」の釈義が間違っていることは、ゲゼニウスを見れば明らかです。ヘブル語の用法では、バビロンはバビロニア帝国を指すのではなく、「バビロニア帝国の首都であるバビロン」を指すことが、ゲゼニウスに明示されているからです。

もちろん、「アレツを伴う」場合には、バビロンの土地・人々・体制・国家を表します。しかし、問題の『永久廃墟預言』が記されているイザヤ書第13章19節から22節では、バビロン単体で言及されているのですから、ここは字義通り、「バビロンという都が永久に廃墟となる」と解釈すべきです。そうして実際に、バビロンの都は数千年にわたって砂漠の下に埋もれていたわけであり、現在は考古学者の手によって遺跡の修復が進んではおりますが、いまだにアラブ人はだれもそこに住もうとしません。なぜなら、ベドウィンたちの間では「妖魔ジンが出没する呪われた地」として恐れられているからです。まさにイザヤに「アラブ人さえ、そこに天幕を張らない」と言われている通りです。

さて、バビロンの永久廃墟預言が誇張法でないことが明らかになったのであれば、ゲネアにかかわる「いまだかつてなく、今後も二度とないような艱難」という新約聖書の用法もまた「誇張法ではないかもしれない」と推定しなければなりません。そうではなく、「ポストミレニアリズムが絶対正しいのだから、誇張法に決まっている」と最初から先入観をもって読み込むのであれば、それは、慎重さを欠いた、粗雑な聖書解釈になってしまいます。

では、「いまだかつてなく、今後も再びないような艱難」とは、どれほどの規模を指すものなのか？ それは、文脈を見て判断すればよいわけで、主イエスが続きの文脈において「ノアの

洪水」に言及しておられるのですから、「いまだかつてなく、今後も再びないような難難」とは「ノアの洪水以上の規模の難難」と推定するのが妥当であろうと思われます。

では、再建主義者が言うように、紀元70年のエルサレム陥落が「ノアの洪水以上の規模の難難だったのか？」歴史を見る限り、けっしてそんなことはなかったわけです。そうであるのなら、「大難難はまだ起きていない」と考えるのが当然なのです。

それでは、「この世代が過ぎ去らないうちに大難難が起きる」と言われた主イエスの言葉は、地に落ちてしまうのだろうか？

注意しなければならないのは、「この世代が過ぎ去らないうちに大難難が起きる」と主は言われたのではなく、「大難難が起きるまでは、この世代は過ぎ去らない」と言われたのです。この微妙な違いは、大きな違いです。

ゲネアが「期間33年の世代」とであると仮定し、かつ、「この世代が過ぎ去らないうちに大難難が起きる」と主が言われたのであれば、明らかに主の言葉は地に落ちたことになります。

しかし、実際には主は「大難難が起きるまでは、この世代は過ぎ去らない」と言われたのですから、わたしたちは、問題の「ゲネア」がどのような意味なのか、慎重に釈義しなければならないことになります。

そこで、リッデル・スコットにあたると、ゲネアには「血統、家族、人種、世代」という意味があり、キッテルにあたると、ゲネアには「罪と連帯する民の全体」という包括的な意味がある、と示されています。そこで、ゲネアは「メシアを拒絶するユダヤの民の全体」とする釈義が導き出されることになるわけです。

□ 113 反論への反論

[山谷](#) - 2004/04/12 16:29 -

フルプレテリズム派については、もはや、批判する必要がないと思います。なぜかという、パーシャルプレテリズム派は、すでに、フルプレテリストをアナテマしてしまったからです。

問題は、パーシャルプレテリズム派に移って来ており、今後は、パーシャルプレテリズム派「だけ」に焦点を絞ればよいと考えています。

さて、反論に対して以下のように反論します。

1. ヴァンティル問題

確かに、キャプテン・マクの掲示板において、ラビット氏へのレスを書いた時点においては、わたしはまだ、ヴァンティルとラッシュドゥーニーとゲイリー・ノースの子弟関係の順序がよくわかっていませんでした。富井氏が「男らしく正々堂々と出て来て議論しなさい」とお誘いくださったので、それから注意深く研究するようになり、「ヴァンティル」についての事実誤認に気がついた次第です。そこで、「再建主義大論争を回顧する」のHPでは、以下のように訂正文を入れてあります。

>上記文章については、ひとつ、事実誤認があります。それは、上記文章中の下線部分です。正しくは「ヴァンティルの前提主義を土台として、ラッシュドゥーニーが再建主義を創始し、それをゲイリー・ノースやバーンセンら神学者・思想家が発展させた」と訂正いたします。なぜなら、コーネリアス・ヴァンティルは再建主義に大きな影響を与えたものの、ヴァンティル自身は司法律法の現代社会への適用を説きませんでした。その意味では、ヴァンティル

を再建主義者と言うことができないからです。

これは、ストレイシーブ氏が、ロバート・シューラーをめぐる「ソソ氏」の発言を、山谷の発言のように言ったり、ゲネアとすべきところを「ネゲア」と言ったりしているのと同レベルの、単純な事実誤認です。

これについては、HP上で訂正しているのですから、問題は解決済みです。（ストレイシーブ氏は、いまだ訂正はしておられないようですが）

■112 反論がアップされています 観客 - 2004/04/11 20:40 -

ミレニアムの掲示板においても反論がアップされているようです。
フルプレテリストの批判をしてほしいそうです。

■111 なるほど。（109への返信です） 自由キリスト者 - 2004/04/09 21:18 -

山谷大尉殿、ありがとうございました。
たいへん、勉強になりました。

■110 バビロンの釈義について 山谷 - 2004/04/09 15:25 -

念には念を入れて、「バビロン」のヘブル語における通常の用法はどうなっているのかも、押さえておきたいと思います。

ゲゼニウス・ロビンソンの『オックスフォード・ヘブル語辞典』によれば、次のようになっています。

バベル

- (1) 神の門
- (2) ユーフラテス川に面した、古代バビロニアの首都
- (3) 混乱、困惑
- (4) (アレツに伴って) バビロンの土地・人々・政治・国
- (5) (メレクに伴って) バビロンの王
- (6) (ベートに伴って) 擬人化されたバビロンの町

■109 異端宣告について 山谷 - 2004/04/09 10:44 -

わたしは再建主義を異端宣告しようとは思いませんし、そもそも、だれかを異端宣告できる立場にもいません。

異端宣告のためには、要件があると思います。
古典的なものとして、異端判別の三つの基準があります。

第一は、聖書正典です。旧新約聖書66巻を指します。
第二は、世界信条です。エキュメニカル公会議で作成された信条です。
第三は、地方教会です。地域の信仰共同体の信仰と生活を監督するために立てられている「霊的権威」です。改革長老教会の場合は「中会」や「大会」、ルーテル派やメソジスト派の場合は「監督」、聖公会や正教会の場合は「主教」、カトリックの場合は「司教」です。ただし、バプテストや単立教会の場合は、ひとつの教会を超える権威を上には立てませんから、個々の信仰共同体が個別に判断することになります。

聖書に照らしただけでは、異端とは宣告できませんし、世界信条に照らしただけでも、異端とは宣告できません。聖書と世界信条と、この二つに照らして異端性が明確になった場合であっても、やはり、それだけでは、異端とは宣告できません。なぜなら、異端宣告が出来るのは、地方教会の「霊的権威」だけだからです。しかし、司教にしても、監督にしても、主教にしても、自分ひとりの判断で異端宣告することはあり得ません。必ず専門的な神学者の会議に意見を求めることになります。しかも、ひとつの大学の神学者だけでなく、複数の大学の神学者に意見を求めます。

以上が、異端宣告の要件です。これをあてはめた場合、わたしは専門的な神学者でもなく、監督でも主教でも中会議長でもありませんし、バプテストの教会総会議長でも単立教会の牧師でもありません。また、複数の大学の神学者会議に対して、再建主義についての意見を公に照会したことがあるわけでもありません。

よって、わたしは、再建主義だけでなく、だれに対してであっても、異端宣告を出来るような立場にはないことが、おわかりいただけると思います。

しかし、以上の要件を逆に、富井氏にあてはめてみるならば、やはり、富井氏もまた、他のだれをも異端と宣告できるような立場にはないことが、明らかになるでしょう。富井氏は、フルプレテリズム再建主義者やワンネスペンテコスタリズムの再建主義者に対して「異端の嫌疑が濃厚」と警告することは出来たとしても、「異端宣告」までは出来ないはずなのです。

しかし、再建主義については、スコットランド長老教会（フリーチャーチ）が、2001年9月の大会において、「再建主義は聖書ともウェストミンスター信仰告白とも相入れない」との声明を決議しました。この大会決議は、スコットランド長老教会大会が任命した複数の専門的な神学者からの報告書を得た上で行われたものです。

これを見る限り、上記の異端の三要件である、聖書正典・世界信条・地方教会を、すべて充足しているように思われます。

しかし、大会決議は「ウェストミンスター信仰告白と相入れない」と言っているのであって、「世界信条と相入れない」とまで言っているわけではありません。

そこで、「大会決議は異端宣告ではない」ということになります。「真剣な憂慮の表明と、再建主義者への警告」というレベルのものでありましょう。この警告を受けても再建主義者が改めない場合は、改革長老教会が再建主義者との交わりを絶つという「教会戒規」を行使する可能性がないとは言えませんが、おそらく、フリーチャーチは、そこまではやらないでしょう。

しかし、もし仮に戒規が執行されて、再建主義者が改革長老教会から除名されたとしても、それでもなお、異端として確定されたことにはなりません。なぜなら、ウェストミンスター信仰告白という「教派の信条」への違反を問われたただけであって、「世界信条」への違反までもが問われたわけではないからです。

107 議論再開

観客 - 2004/04/09 06:57 -

ミレニアムの掲示板においても、この掲示板に書かれた文章を引用しての反論が始まっていますね。

これは議論を拒否していた富井氏が事実上の議論再開をはじめたようですね。

山谷大尉殿から富井氏への異端宣告はおそらく無いでしょう。
異端宣告は富井氏のもつ神学からなされるものであって、
山谷大尉殿の神学には異端宣告とう発想はでてこないと思います。

106 再建主義に異端宣告をしますか？

自由キリスト者 - 2004/04/08 18:54 -

山谷大尉殿

結局、再建主義は、「異端」なのでしょうか。

105 ゲネアの釈義について（４）[山谷](#) - 2004/04/08 16:24 -

念には念を入れて、聖書ギリシャ語だけでなく、「ゲネア」の古典ギリシャ語における通常の用法はどうなっているのかも、抑えておきたいと思います。

リッデル・スコットの『オックスフォード・ギリシャ語辞典』によれば、次のようになっています。

ゲネア

- (1) 血統、家族
- (2) 人種、世代
- (3) 子孫
- (4) 階級、種類
- (5) 出生地
- (6) 時代、人生の時間
- (7) 生年月日

つまり、古典ギリシャ語における「通常の用法」を採用した場合でも、「ゲネア」を「イエスを拒否したユダヤの民」として釈義することが可能なのです。

103 ゲネアの釈義について（３）[山谷](#) - 2004/04/08 15:23 -

「ゲネア」を理解するのに重要だと思われるのが、マタイ12:39での用法です。そこでは主イエスによって：

神を捨てた悪い時代は、しるしを求める

とされています。

この「神を捨てた時代」は、直訳すれば「姦通した時代」であり、英訳聖書では"adultery"という訳語が充てられています。これは、神と民との関係を夫婦の愛になぞられている、ホセア書に代表されるような、旧約聖書に見られる類比的概念です。マタイ12:39をディートリッシュは注解して、このように述べています。「この（旧約聖書において夫の愛に類比されている神の）愛を拒む者は、神がかれらのところに来たとき、神を認める術を知らないことになる。イエスはく預言者ヨナの奇跡>以外には、しるしを与えようとされない」。

つまり、共観福音書における「ゲネア」の用法は、「旧約時代において神の愛を拒んだように、新約時代において『御自分の民を訪れ、三日目に墓から出るというヨナのしるしを与えたイエス』を拒んだ、ユダヤの民の全体」を指す、という釈義が可能になるわけです。

このようなマタイ12:39の釈義を踏まえた上で、ディートリッシュは24:34を、次のように注解しています。

34節はわたしたちがすでに数度、提起した質問を投げかけている。イエスはこの世の終末がすぐ間近に迫っていると信じておられたのであろうか。あるいは「時代」という言葉は、わたしたちの使っている言語の中で用いられているのとは異なった意味に解釈されるべきなのだろうか。ギリシャ語では、それは「種類、種族」をも意味することができる。このように訳すのであれば、この語は「この人々」、ユダヤの人々を意味することになる。選びの秩序の中ではユダヤの人々は、かれらが拒絶したそのかたが、力と栄光とに包まれて明らかにそのみ姿を示されるであろうその日まで生きつづけ、かれを認めざるをえなくなるであろう（ローマ9章-11章、フィリピ2:9-11参照）。この第二の解釈は、マタイ福音書に従えば、きわめて妥当のように思われる。

これを終末論的文脈で考えるならば、「ナザレのイエスがメシアであることを認めないユダヤ教徒は、『異邦人の時』と呼ばれる中間時代において存在し続け、艱難時代を通過して、キリストの再臨の栄光を目撃し、ついに、イエスをメシアとして受け入れ、かくして『全イスラエルが救われる』（ローマ11:26）に至る」ということになります。

これと関連して、パウロは「中間時の中間領域を占める天使的勢力」の範疇の中に「律法制定の仲介者・養育係・後見人である諸霊」を入れていますから、ユダヤ教徒のアイデンティティーを規定する「律法主義」は、「国家権力」と同様にして、キリスト再臨まで存続し続ける、ということになります。

上記の解釈こそが、現実の歴史の状況に最も正確に適合するものです。

さて、再建主義者は、ゲネアの釈義との関連で、バビロンの「永久廃墟預言」の字義性を問題として提起しました。「聖書は、永久にバビロンに人間は居住しないと預言しているのに、現在のイラクには人間が住んでいるではないか」というわけです。

このような誤解は、現在のイラクの領域主権に相当する古代国家「バビロニア」と、そのバビロニアの首都である「バビロン」とを混同してしまっていることに起因します。

聖書の「永久廃墟預言」は、領域主権であるバビロニアについて言われたものではなく、あく

まで、その首都である「バビロン」について言われたものです。

字義通りの解釈にこだわるのならば、そこまで徹底しなければ、到底本物とは言えません。

さて、それでは、現在の「バビロン」は、どうなっているのでしょうか。バビロンは聖書の預言通りに廃墟と化し、砂漠の砂の下に埋もれてしまいました。そうして、地元のベドウィン（アラブの遊牧民）は、バビロンの廃墟に出る悪鬼（ジン）を恐れて、だれひとりとして、そこに近づく者はありませんでした。このため、バビロンの遺跡の明確な位置は、19世紀にヨーロッパの考古学者が地面を掘り起こして再発見するまで、長く忘れ去られていたのです。

聖書が言う「バビロン」は、文字通り、古代バビロニア帝国の首都であった「バビロン市街」を指すのですから、再建主義者が言う「いままもイラク全土に人間が住んでいるではないか」という問題提起は、ほとんど妄言に近いものといえるでしょう。

■101 ゲネアの釈義について（2）

[山谷](#) - 2004/04/08 14:45 -

再建主義側の反論を見ると、どうもこの「ゲネア」の釈義によって、再建主義が立ちもし、倒れもする、「急所」であるということのようです。確かに、ゲネアが33年間という期間を示す用語であるならば、パーシャル・プレテリズムは立つことが出来、その論理的帰結として、後千年期王国論も整合性を持つことが出来るでしょう。

しかし、ゲネアの釈義は、聖書研究者の間で分かれる点であり、統一見解は存在しない、と言うべきです。

たとえば、NTD新約聖書註解シリーズの中で、エドゥアルド・シュヴァイツァーが執筆している「マタイによる福音書」では、次のように言われています。

23：36 マタイは「この世代」という言葉で、イエスの受難の時に生きていて、さらにエルサレムの崩壊を体験した世代を考えているのであろうか。それともそれを、27章25節に基づいて、イエスを排斥した全イスラエルであると説明しているのであろうか。24章36節の注解を見よ。

24：36 むしろ、マタイは「この世代」という表現を、イエスを拒否するユダヤ教に関係づけている可能性がある。

さて、上記の注解でシュヴァイツァーが示唆している「ゲネアはイエスを拒否するユダヤ教に関係づけられている」という可能性は、新約聖書神学的に支持され得るものなのでしょうか？

そこで、キッテル新約聖書神学事典をひもといてみましょう。そこでは、ビュッセルが次のように記しています。

ゲネア

この語は、(a) 誕生、血統、(b) 子孫、(c) 種族、(d) 世代を意味する。新約聖書においては、共観福音書において共通に用いられているが、パウロ書簡においてはまれである、ヨハネ文書にはまったく見られない。ほとんどの場合、「世代」を意味し、

しばしば、「罪深い」（マルコ8:38）「悪い」（マタイ12:45）「不信仰で邪悪な」（マタイ17:17）という形容を伴うことが、定式となっている（マルコ8:12など）。使徒言行録2:40の「曲がった時代」、フィリピ書2:15の「ねじ曲がった世代」は、申命記32:5に基づいたものである（マタイ17:17及び申命記32:20を参照）。イエスが用いた「世代」は、包括的な意図を表現するものである。それによりイエスは、民の全体を指し、かつ、民と罪との連帯性を意識している。ゲネアは、マタイ1:17、使徒13:36、エフェソ3:5、コロサイ1:26において「時代」の意味を持つ。一方、ルカ16:8では「流儀・生き方」の意味を持つ。使徒8:33では、イザヤ書53:8の原文で漠然と示された内容が翻訳され、暗示されている。

以上の新約聖書神学による綿密な釈義をふまえるなら、イエスが「ゲネア」という言葉を用いたとき、「不信仰な民の全体、すなわち、到来したメシアを拒絶する民の全体」を意味している、と考えても、少しもおかしくないわけです。

それでは、何が何でも「ゲネア」を「期間33年間の世代」と解釈しなければならないとする再建主義者の姿勢は、どう考えるべきなのでしょう？

再建主義者は、自分たちが奉じる「後千年期王国論」を崩壊させるわけにはいかないので（もしそれが崩壊したならば、再建主義の政治的アジェンダのすべてがナンセンスになってしまいます）、それゆえ、「ゲネア」については、綿密な釈義をせずに、一様に機械的に「期間33年間」として解釈せざるを得ないのです。

これを見ると、再建主義の体系が、いかに粗雑な聖書解釈に依拠しているかということが、よくわかります。

■98 ゲネアの釈義について

[山谷](#) - 2004/04/07 17:06 -

さて、「ゲネア」が、「罪の中に捕らわれていて、キリストに反抗する姿勢を示す、旧約律法の下にある人々」を意味するのであれば、主が予告された大難難と共にゲネアは過ぎ去り、すべてのユダヤ人がナザレのイエスをメシアと告白し、受け容れて、パウロの言う「こうして全イスラエルが救われるのです」（ローマ11:26）が実現することになります。

そこで、紀元70年のエルサレム陥落を「大難難」とであると仮定した場合、エルサレム陥落以降にユダヤ人は福音を受容するどころか、むしろ、「ユダヤ教徒としてのアイデンティティーを完全に確立するに至った」というのが、歴史の事実です。

つまり、「エルサレム陥落と共にゲネアが過ぎ去る」という事態にはならず、むしろ、「エルサレム陥落以降も、ゲネアは存続している」という事態になっているのです。

このことから、パーシャル・プレテリズムの釈義は、やはり間違っており、大難難は、これから未来のことであると言うことが出来ます。なぜなら、世界のユダヤ人の大多数が、福音を受容していないからです。

朝鮮時代は紀元70年のユダヤ戦争において成就し、

96 天啓24:37に於いて「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである」と言われていることから、まさしく主が、ノアの洪水を念頭に置かれていたことがわかるのです。

山谷 - 2004/04/07 16:46 -

再建主義者、曰く、

>イエスははっきりと「この世代が過ぎ去る前にこれらがすべて起こる」と24章自体の中で述べているのだ。これをどう解釈する？ギリシャ語で「ゲネア（世代）」とは「30-33年」である。プレ・ミレの人々が大患難時代と呼ばれる時代に起こるとしている数々の「前兆」は、「30-33年のうちに起こる」とイエスがはっきりと述べておられるのに、なぜ彼らは無視するのか？？？

無視しているのではなく、パーシャル・プレテリズムの釈義が間違っているのが明白であるために、ことさら論駁する必要性を、だれも感じていないからでしょう。

艱難の規模について、主イエスは、次のように言われています。

「そのときには、世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来るからである」

これは、終末の艱難の規模と内容のスケールについて明示した、命題的な真理であると考えることが出来ます。つまり、艱難時代は、その苦難の規模と内容において、「世界創造以来かつてないほどのスケールであり、また、それがひとたび来たならば、以降二度と繰り返されることのない」のです。

艱難時代についてのこの命題的真理を、「ユダヤ戦争」と「エルサレム陥落」に当てはめるならば、ユダヤ戦争もエルサレム陥落も、いずれも、その苦難の規模と内容において「ノアの洪水」をはるかに下回るものであり、また、紀元70年以降、ユダヤ戦争やエルサレム陥落をはるかに凌駕する苦難を、人類は歴史の中で繰り返し繰り返し経験して来ているからです。

さて、問題は、主が「そのときには、世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来るからである」と言われたときに、主御自身が「ノアの洪水を凌駕する規模の苦難」を念頭に置いておられたのかどうか、ということです。

このことは、マタイ24:37において「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである」と言われていることから、まさしく主が、ノアの洪水を念頭に置かれていたことがわかるのです。

そこで、パーシャル・プレテリストが言うように、仮にユダヤ戦争とエルサレム陥落において「艱難予言」が成就したのであれば、主イエスが言われた「そのときには、世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来るからである」という御言葉は、地に落ちてしまうことになるのです。

しかし、御言葉が地に落ちるような聖書解釈は「偽」と判定されるわけですから、結果として、パーシャル・プレテリストの釈義は、間違っている、ということになります。

さて、世界と歴史の終末は、旧約聖書から新約聖書に至るまで一貫して「破局的出来事」と結び付けられて語られています。そうして、ヨエル書においては、終末論的賜物として「聖霊」が信者に与えられることが、約束されています。

パウロ神学においては、聖霊は、信者に対して身体の復活を保証する「終末論的保証」「終末論的担保」として捉えられています。

現在の経緯において、世界中のキリスト者が、聖霊を体験しているという事実は、「終末論的保証を受け取っており、終末に対して備えられているが、いまだ徹底的な終末には至っていない」という、中間時の緊張状態を意味しています。そうして、主イエスは、艱難時代においてキリスト者が迫害を受けたときに、王や司の前で語るべき言葉をキリスト者に授けるのは「聖霊」であると言われているのですから、主御自身もまた、聖霊を「終末論的保証」として捉えておられたことがわかります。

このように、艱難を伴う徹底的な終末の到来は、限りなく近づいているが、いまだ来ていない、ということになり、このことは、キリスト者の聖霊体験からも弁証することが可能です。

では、パーシャル・プレテリストが問題とする「世代」（ゲネア）の釈義は、どのように行うべきなのでしょう？

福音書における「ゲネア」の用法は、「罪の中に捕らわれていて、キリストに反抗する姿勢を示す、旧約律法の下にある人々」というものです。律法という養育係の手によって、キリストの目の前に連れて来られたのに、キリストを受け入れようとはしない、ユダヤ人です。

これが「ゲネア」が指し示す意味内容であるとするならば、「ゲネアが過ぎ去る」とは、「福音を拒否していたユダヤ人が一転して、福音を受容し、ナザレのイエスをメシアと告白するに至る」ということを意味することになります。

ところで、歴史において、いまだ、上記のような「回心」は大規模に起きておりません。それゆえ、「このゲネアは、いまだ過ぎ去っていない」ということになります。

■95 再建主義者の言いがかりに反論する

[山谷](#) - 2004/04/06 14:34 -

再建主義者、曰く、

>救世軍については、ここでも取り上げたように、聖書に立つと言いながら、聖書信仰ではない人を教師にしている。

しかし、このような揶揄に対して、わたしは反論します。

なぜなら、わたしは、聖書の逐語靈感を信じており、ファンダメンタルズ（キリストの神性・受肉・奇跡・贖罪死・復活・昇天・再臨）を堅持しており、紀元前4004年における六日間世界創造を採用しているからです。

これを「聖書信仰」と言わずして、何をもって聖書信仰と言うのだろうか？

そうして、聖書を字義通りに尊重するならば、「国家権力は中間時の中間領域を占める天使的勢力であり、キリスト再臨によって天使的勢力が滅ぼされるまでは、国家権力はキリストの頭首権に由来する『国家の絶対主権』を行使し続ける。ゆえに、中間領域を占めているのは、自律的・世俗的ヒューマニズムではない」ということになります。

そうであるのに、再建主義者は、「ヒューマニズムが支配する自律的中間領域を、キリスト者は、キリスト再臨の前に、征服せよ」と主張するので、実は、再建主義者の方こそ、「聖書信仰に立っていない」ということになるのです。

結論として、「聖書に立脚していない再建主義の思想こそ、早晩、ヒューマニズムに墮するで

あろう」ということになります。

なぜなら、聖書が「キリストが再臨するまでは除去されない」と言っているものを、「わたしたちは除去すべきだし、することができる」と言い張るのですから、再建主義こそが真のヒューマニズムなのです。

■94 再建主義の統治する地域

自由キリスト者 - 2004/04/04 19:06 -

国家は難しいとしても、モルモン教みたいにある州を彼らに任せて統治させてみてはどうだろう？州の名前は、オレンジ自由州ならぬ、マスカット自由州でもいいではないか。

州が無理なら市町村でもいい。

争論喧嘩が絶えない街になりそうだけど・・・。

お互いがお互いを異端者呼ばわりする街・・・。

■93 モデル国家を見てみたいな

内なる人 - 2004/04/02 23:36 -

再建主義に基づいた国家が誕生しその国がどのような結果になるかで再建主義者が正しかどうか証明されるのかな・・・。

■92 どう考えても、再建主義は、普及しない

自由キリスト者 - 2004/04/02 16:46 -

再建主義は、聖書信仰に立つ福音派のクリスチャンと、世俗的社会の双方にたいして敵意を抱いているので、その運動が有名になればなるほど、社会全体から圧迫を受けざるを得ないと思います。

再建主義の主張は、カルヴァンのとはいえ、宗教改革の時代に社会を悩ませた「宗教改革過激派」の主張を彷彿とさせます。あのころも、「神を信じないものは殺されなければならない」という主張がありましたが、実際に殺されたのは、彼ら過激派のほうでした。

■91 カルヴァンが見る理性能力と一般恩恵（2）

[山谷](#) - 2004/04/02 10:43 -

さらにカルヴァンは、続けて、古代の異教徒の中に見られる、驚くべき理性の光が、聖霊による恵みの賜物にほかならないことを述べています。以下は、『キリスト教綱要』第2編2:15-16の抜粋です。

われわれは、異教徒の著作家において、このこと（理性の光）に出くわすごとに、かれらのうちに輝いているおどろくほどの真理の光によって、次のことに注意をうながされる。すなわち、人間の精神は、たといどんなにその完全さから墮落し、よこしまになっているとしても、しかもなお、神の特別な賜物をまとい、これによって整えられているのである。もし、われわれが神の御霊こそ真理の唯一の源泉だ、ということを考えているならば、神の御霊を侮辱したい人でないかぎり、真理そのものの現われるところ、どこにおいても、これをしりぞけたり・軽んじたりしてはならない。なぜなら、御霊の賜物は、これをあな

どり・はずかしめることなしには、けなすことができないからである。

あのような立派な公正さをもって市民的秩序と規律とを後世に残した古代（ギリシャとローマ）の法律家たちに、真理が現われていることを、われわれは否定するのであろうか。また、哲学者たちも、自然（の秘密）についての緻密な瞑想において、また精巧な叙述において、盲目であったといえるであらうか。論述の方法を確立し、理性にもとづいて語ることをわれわれに教えた人（異教徒）たちが、理解力をもっていなかったといえるであらうか。医術をつくりあげ、われわれのためにその労をささげた人を狂気だといえるであらうか。数学的な諸問題についてはどうであらうか。われわれはこれを狂人の妄想だといえるであらうか。いな、である。われわれはこれらのことについて古代の人々のあらわした書物を、大いなる讃嘆をもって読まずにはおれない。なぜ讃嘆するかといえば、かれらを非常にすばらしいと認めざるをえないからである。

われわれはこれら（古代の異教徒に与えられた理性の光）が、神の御霊のもっとも卓越した恵みの賜物であることを忘れてはならない。神は、人類の公共の福祉のために、かれの欲したもう人々にこれをわかち与えたもうのである。

以上を見ると、「異教徒の理性能力は聖霊による恵みの賜物である」という、カルヴァンの「一般恩恵」の理解がわかります。

そうして、カルヴァンによれば、異教徒の理性能力を否定したり、軽視したりする者は「神の御霊を侮辱することである」と、明言されています。

よって、文化と社会の構築にあたって、唯一、前提主義に立つ再建主義キリスト者だけが「適任者」と主張する再建主義は、一步間違えば、神の御霊を侮辱することになりかねないのです。

86 カルヴァンが見る理性能力と一般恩恵（1）

[山谷](#) - 2004/04/02 09:56 -

再建主義者は次のように言います。

＞クリスチャンは、あらゆることについて、けっして認識の出発点を人間においてはならない。なぜならば、人間理性に置くときに、聖書によらずに、人間理性だけで築き上げられた様々なノンクリスチャンの情報を無批判に受け入れることになるからである。これは自殺行為である。

再建主義者は、人間の理性能力を軽視しますが、これは、再建主義の体系の中に「一般恩恵」と「自然法」が欠落していることから来る、論理的必然だと言えます。

ところで、再建主義者が忠誠を尽くす（と自負している）ところのカルヴァン自身は、一般恩恵について、どう考えているのでしょうか？ 以下は、カルヴァンの『キリスト教綱要』第2編2：13-14の抜粋です。

その（人間の理性が研究する）努力は何の効果もないほど無益なのではない。

人間は生来「社会的動物」なのであるから、自然的衝動によって、その社会を支え・保つように傾向づけられている。したがって、われわれはすべての人のたましいのうちに、市民としての公正な秩序についての普遍的な印象が植えつけられているということを認める。ここから、どの人間集団も「法」によって制約されねばならないことを理解しないもの、また、これらの法の原理を精神のうちに把握しないものは、ひとりも見出されないのである。ここから、すべての民族、また個々人の間に「法」における変わらぬ一致が由来する。

すべての人のうちに、ある種の政治的秩序の種がまかれているという事実は動かせない。そしてこのことは、この世の生活を整えるにさいして、何人も理性の光を欠いていないことの大きい証明である。

（理性の）光は、すべての人に生まれながら与えられていて、それは神のいつくしみによって、めいめいに価なしに贈られている神の賜物である。・・・これは不敬虔なものにも無差別に与えられているのであるから、正当に、自然的な賜物の中に数えられている。

■85 ウェストミンスター信条はキリスト教ではない？

[山谷](#) - 2004/04/02 09:25 -

再建主義者は、次のように述べています。

>聖書律法は、過去のイスラエルにのみ適用され、今日の教会や世俗世界では適用できないとする立場は、キリスト教ではない。このような立場は、聖書に啓示された法以外のものを主張するので、人間理性を聖書の上に置く自然宗教である。

ところが、ウェストミンスター信仰告白は、次のように明言しています。

さらに、政治体としてのイスラエルに、神は様々な司法的立法を与えたが、それはこの民族の国家と共に消滅し、今や、その持つ一般的公正さが要求し得る以上のことは何も義務付けはしない。

ウェストミンスター信仰告白19:4

そうしますと、論理的に、再建主義者は「ウェストミンスター信仰告白はキリスト教ではない」と断言しなければならないことになります。このことから、再建主義者は「自分たちは信条主義者である」と言うことは、不可能になります。

■84 土俵

[山谷](#) - 2004/03/30 13:14 -

現代キリスト教における「グル」と呼ばれ、福音派におけるバルト、とも言われた、神学思想家フランシス・A・シェーファーは、非キリスト教思想と対論する場合には、相手の思想体系に立脚して「思考的シミュレーション」を行い、そこから出てくる結果が、現実の社会や人間の生活に対して「意味を与える」ことが可能かどうかを判断しました。シミュレーションを行って、その結果が、独裁政治であるとか、全体主義であるとか、警察国家であるとか、理性の否定であるとか、超越的体験への逃避であるとか、コミュニケーションの断絶であるとか、異文化の否定であるとか、であるならば、シェーファーは、その思想体系を「偽」としたのです。

ところで、再建主義の人々は、自分たちを、アブラハム・カイパーから、シェーファーを経て、ヴァンティルを通し、ラッシュドゥーニーに至る系譜に立つ者たちである、との自覚を持っているのです。再建主義者の自負とは、「再建主義こそが、人間と社会と文化に、本当の意味と価値を与えることのできる、唯一の思想体系だ」ということです。

そうして、恐ろしげに聞こえる「堕胎者の公開処刑」「公的福祉の全廃」「経済活動の完全自由化」「所得税と資産税の全廃」は、現代人を精神的カオスと破滅から救うことの出来る、正当な政治的アジェンダだ、と信じているのです。また、彼らは、その正当性は、唯一、聖書によってのみ根拠づけられている、と確信しています。

以上を鑑みますと、再建主義と対論するには、「シェーファー流」の対論方法だけが、唯一可能な方法だ、ということになります。それは、「再建主義という思想体系にもとづいた思考的シミュレーション」を行って、その結果出て来たものを、「聖書の組織神学的体系にもとづいた思考的シミュレーション」による結果と並べて、比較対照させてみることなのです。

それが、たとえば、「奴隷制度」「男女共同参画社会」「利子付債務」「国家権力についての新約聖書学的概念像」という問題になってくるわけです。

あとは、ふたつを並べて、どちらが聖書的であるかを判定すれば、「真」か「偽」かすぐにわかります。

たとえば、国家権力の場合は、再建主義の思想体系においては「ヒューマニズム」だと考えられているのに対して、新約聖書の組織神学的体系においては「天使的勢力」だと考えられています。

この二つを比べると、一致点はまったく存在しないのですから、真理基準である聖書に照らして、「再建主義が偽である」という判定になるわけです。

なお、Y2K問題については、ゲイリー・ノースは、「Y2Kによって西欧文明は徐々に衰退し、崩壊していく。その後、再建主義が支配的思潮となり、後千年期王国が実現する」という予測を立てていました。ゲイリー・ノースは、自分のウェブサイトでY2Kを警告する論陣を展開し、当時、マスコミにも非常に注目されていたのです。しかし、結果的には、大した混乱は起きず、西欧文明が崩壊するという事態にも、なりませんでした。これに対して、再建主義側は「ゲイリー・ノースが精力的に警告したからこそ、各国の政府や企業がY2K問題に本腰で対策を行い、大した事態にならずに済んだのだ。だから、再建主義の予言が外れたのではなく、再建主義の主張によって、社会は救済されたのだ」という反論を展開しています。

ですので、ヨナの預言によってニネベが災いを免れたようなものだ、と考えているわけです。自分たちが偽預言者だ、などとは、全然思ってもいないのです。

しかし、Y2K問題でわかることは、再建主義もまた、「文明の崩壊とカオス」を通過しなければ

ば、後千年期王国は到来しない、と考えているということです。再建主義は、終末の難難時代を言う前千年期再臨説を「社会の破滅だけを説いて、人間に希望を与えない教説」として批判するわけですが、「文明の崩壊を通らなければ千年王国が到来しない」と考えている点では、再建主義も前千年期再臨説も、同じパラダイムなのです。しかも、再建主義もまた「陰謀史観」の上に成り立っており、前千年期再臨説の後難難期携挙説が抱える「陰謀史観」という悪い性格まで、似てしまっています。

■82 同じ土俵？

自由キリスト者 - 2004/03/30 11:45 -

山谷大尉殿（救世軍の組織はよくわかりませんが、牧師と解釈してよろしいのでしょうか？）

・・・・・・・・

やはり、再建主義者と「同じ土俵」に立たなければ論駁できないのでしょうか。論敵の土俵にわざわざ立たなくてもよいと思うのですが・・・。

さて、律法は偽預言者について、何と言っているのでしょうか？
もし、その予言が外れたならば、その者を恐れるには及ばない。その者は処刑しなければならないと書いてあるのではないのでしょうか。

再建主義者のゲイリー・ノースは、「Y2K（2000年問題）が起こって西洋文明は没落する」と言ったそうですが、実際そのようなことは起こらず、西洋文明はますます発展しています。

徹底的な聖書信仰に立っても、このような間違いを犯すことがあるのですね。

■81 公理について

山谷 - 2004/03/28 00:24 -

大変失礼しました。公理そのものは出発点となる前提であって、公理そのものを証明することは、できないのですね。
何分、数学が苦手なものですから、おゆるください。

再建主義は、人間の理性能力が墮罪によって損なわれてしまっているために、人間は啓示を出発点にしなければ、あらゆる事柄について正しい認識を持つことは出来ない、と考えるのです。
つまり、「聖書を前提にしなければ、科学も、経済も、政治も、芸術も、教育も、文化も、何もし得ない」という考え方なのです。

これに対して、聖書以外のものを前提にして再建主義を論破しようとしても、再建主義者側からは「それは前提主義に立っていない」というひとことで、門前払いをされてしまうのです。

そこで、聖書をあたかも「真理の命題集」とみなすような、聖書解釈の方法によって、つまり、前提主義によって、再建主義を論駁しなければならない。この方法だけが、唯一、門前払いをされない方法なのです。

この場合、つまり、聖書を「真理の命題集」として読むような読み方をすることは、ひとつひとつの聖句がちょうど「公理」のようなものとして取り扱われるわけです。

いちばん問題となるのが、「律法は廃棄された」という命題と、「律法の一点一画も滅びない」という命題です。また、聖書が国家をどう捉えているか、ということも、問題になります。

もちろん、新約聖書の中に複数の公理系が含まれている、と考えるような、新約聖書神学の立場もあることを、理解しております。そのような新約聖書の複合的な構造、あるいは、合同教會的構造は、聖書を立体的に解釈しなければならない必要性を要請します。

しかし、再建主義者の場合は、あくまで、聖書を平板的な命題集として取り扱うのですから、それを論駁するこちらも、同じ土俵に立って戦わなければならないことになります。

>何が霊的に真理であるか、これは主イエスの言葉どおり、実によって判別し得ます。

確かにそうでありましょう。しかし、「墮胎者の公開処刑」「公的福祉の全廃」という政治的アジェンダが、信仰の目標と同一化されるような「実」は、どう考えてもおかしいのではないか？という、こちら側の問いかけに対しても、再建主義者からは、「聖書に照らして、そのどこがおかしいのだ？」と逆に問いかけて来られるわけです。

そうであるならば、再建主義者と同じ方法で、聖書のみに基づいて、「そうはならないはずだ」ということを、論理整合的に説明するしか、反駁方法がないのではありませんか？

■80 サンタフェ研究所

公理の選択 - 2004/03/27 23:53 -

>「自律の領域」が存在する、ということが、数学の公理によって証明
>済みであるとうことなのですか。大変勉強になりました。ありがとう
>ございました。

ノー、ノー、「決定不能」なのです。「公理」はそもそも証明するものではなく、選択するものです。「公理系」の中で無矛盾であれば、自由に選択することができます。「自律領域」について言える事は、あるかないか決定不可能であることだけです。

自由意志が一般恩寵によるのか、何によるのか、私は知りませんが、とにかく私は「公理」を自由に選択できるのです。例えばユークリッド幾何においては「平行線は交わることが無い」のですが、ロバチェフスキーの幾何（さらに相対論のリーマン幾何）では「平行線は交わる」のです。つまりこれは証明するのではなく、選択するのです。

再建主義を論駁するために大尉殿が自由に選んだ「公理」（あるいは聖書の世界観）が「中間領域」であり、その選択の上にアルミニウムが構成されているわけです。

再建主義者もそれなりの「公理」を選択しているのであって、その上に彼らの主張は成り立っているわけです。

しかし大尉殿は自分の選択した「公理」からみて、再建主義の偽なることを証明しようとしておられますが、これはユークリッド幾何学者がロバチェフスキー幾何学者を論駁しようとしているのと同じことになります。不毛です。「公理」は証明できません。ただ選ぶことができるだけです。

啓示は神の一方的真理の提示であり、それは受けるか拒否するかだけです。選択の自由で

す。もちろんここには御霊の照明が本質的です。この意味で「公理」ととても似ているのです。どの「公理系」選択するかで、その後の論理体系の意義が決定されます。しかし公理自体は照明できませんし、同様に啓示もその真なることを証明できません。

そこで啓示を神学という認識体系に論理的整合性を担保しつつ、納めようとする点ですすでに不可能なことをしているわけです。

自由意志が神の何によるのか私は分かりませんが、私は今こうして「公理」を自由に選ぶことができることは確かです。デカルトの「われ思うゆえに我あり」にならば、「われ選択し得るゆえにわれあり」です。これは論理に乗せる以前に、論理を超えた純粹経験として真です。

そしてこの論理を超えた純粹経験において、神がAMであることを直覺的に"知る"ことができるのです。神との合一の経験が永遠の現在にあって展開するだけであり、死と生を超えて、私たちはその永遠の現在の中に安息するだけです。

論理あるいは神学は、この純粹経験-「永遠のいのちとはあなたが遣わしたイエスを知ること」-の抜け殻であり、本体・実質はすでにそこにありません。セミはすでに殻を抜けているのです。

私はただ論理を超えた永遠の現在なる神のうちにとどまることを願うのみですね。それはエクスタシーであります。

何が靈的に真理であるか、これは主イエスの言葉どおり、実によって判別し得ます。永遠の価値のある実を産出するか否か、証明の手段として聖書はこれしか提示していません。

■79 論理的整合性について

山谷 - 2004/03/27 23:40 -

確かに「絶対的に決定されている」が「絶対的には決定されていない」という、二つの矛盾を受け容れて、肯定し、そこを出発点として体系を構築することが出来ると思います。カルヴァンの神学は、その良い例であると思います。神の絶対的な予定を言う一方で、自然法によって統治する自律的な国家を認めているからです。そこでは、「恩寵」と「自然」が、絶妙なバランスを保って、壮大な体系を作り出しています。カルヴァンにとってのバランス点は、「神の栄光」ということなのでありましょう。

このような、二律背反を、肯定して、そこから出発する神学は、おそらく、弁証法的な構造を持った神学、と言うことが出来るのでしょう。

そうであれば、カルヴァンの死後、なぜ改革派神学が二契約論という、まさに弁証法的構造そのものの形態に推移して行ったのかが、よくわかるような気がします。

この、二契約論が世俗化された結果、ヘーゲルの弁証法的歴史哲学が生まれたという見方もあるようですが、このあたりは、本当にそうなのかどうか、いま、非常に興味を持っているところです。

しかし、再建主義者は、「論理的整合性にこだわるあまり、自然・自然法・自律を悪魔的だとして否定する」というところが、問題なのだと思います。再建主義者がカルヴァンのように、神の栄光を頂点として右の「恩寵」と左の「自然」のバランスを同時に取るような、「アーチ構造」を目指していれば、何ら、問題は生じなかったでありましょう。

そのような再建主義者の主張は、「聖書に基づいた論理」の一点張りなのです。これを論破するためには、こちら、論理的整合性を攻める線で行くしかないであろう、と思っています。

■77 サンタフェ研究所さまへ

山谷 - 2004/03/27 23:22 -

「自律の領域」が存在する、ということが、数学の公理によって証明済みであるということなのですか。大変勉強になりました。ありがとうございました。

アルミニウス主義者は、人間は全的に堕落したが、神の一般恩恵によって、自由意志を与えられている、と考えます。ここから、「自律の領域」は存在する、と考えます。

カルヴァンも、人間は全的に堕落したが、神の一般恩恵によって、自由意志を与えられている、と考えます。しかし、この場合の自由意志は、「救いを選ぶか、拒否するか」というような事柄についての意志の自由ではなく、あくまで、日常の生活における判断を可能にするような自由意志。また、安寧な社会秩序を確保するための政治や国家を構築することを可能にする自由意志です。（救いへの予定から漏れた非選民が、自滅しないで、安寧な生活を送ることが出来るよう、神が与えたのが、一般恩恵である、と表現されています）

その意味では、国家は「神にその権威を由来し、神から自立しているわけではないが、自律的な領域である」と、カルヴァンは、考えていたことになります。それを裏付けるように、「自然」「自然の光」「自然法」「一般恩恵」「自律」という用語が、カルヴァン著作集にはちゃんと出ています。このカルヴァンの国家観は、アルミニアンもほとんど同じくするものです。

ところが、再建主義者の場合は、「国家は神と人の間にある自律的なヒューマニズムが支配する中間領域である」と考えます。そうして、再建主義者は、自律的であることは悪魔的である、と考えますから、この「ヒューマニズムの中間領域を、キリスト者が征服して、旧約律法に基づいて支配しなければならない」と主張します。その論理的帰結が、堕胎者などの公開処刑等になる、ということなのです。

おそらく、再建主義者が、カルヴァン主義に徹していたのであれば、上記のような主張が出てくることはなかったはずなのです。なぜなら、カルヴァンは一般恩恵を否定したりはしなかったからです。

そこで、今回の議論でわたしは、新約聖書神学に沿った聖書解釈に基づき、「国家はヒューマニズムの自律的中間領域ではなくて、天使的勢力の自律的中間領域である」という反対命題を示したのです。もし、国家という自律的中間領域が、人間ではなく、天使的勢力という超自然的存在によって動かされているのであれば、「キリスト者が征服して、旧約律法に基づいて支配しなければならない」という再建主義者の主張は、的外れなものとなってしまいます。

天使的勢力による自律的中間領域という命題は、もっぱら、新約聖書の世界観をどう考えるか、という議論になってきますが、もうひとつあるのが、「全的に堕落した人間の意志に、神の恩恵が注入されて、可能とされた自由意志」という、自律の問題があります。これは、自然的な自律ではなく、神の恩寵によって支えられた自律、ということになります。恩寵を、もし「決定論的」という言葉に置き換えることが出来るのであれば、「決定された自律」ということになるでしょう。ここで、いったい、神の恩恵（一般恩恵）が、人間の実存の構造に対して、先験的にどのように働いているのか？ということが問題になってきます。

そこまで議論が行くことになるとは思っていませんけれども、もし、そこまで議論が行くようなことでもあれば、「受肉における恩寵と自然の調和が、聖霊を通して、すべての人間に一般恩恵として影響を及ぼし、意志の自由を可能ならしめている」という、カール・ラーナーの考え方に着目していたいと思っています。

76 二律背反

サンタフェ研究所 - 2004/03/27 23:00 -

はてさて、大尉のおっしゃる「論理的整合性」が何を意味するのかそもそも不明です。

「 $A \leftrightarrow A$ 」が偽であることを二律背反と呼びます。が、これを認めて論理を組み立てることも可能なのです。

神は三にして一、これを「ヒュポスタシスにおいて三、ウシアにおいて一」とか論旨矛盾の無いように"説明"をしますが、これはすでに人間の限られた認識空間に神という存在を入れようとしていることにおいて誤りです。真理は、神は三にして一、ピリオド。

物理的実在ですら、たとえば、電子は波動にして、粒子、ピリオド。これは神の挑発ともいえますね。

論理矛盾とか、二律背反がどうのこうのを言い出すと、アルミニアンの立場自体がいかにあやういか暴露されてしまいますぞ、大尉殿。

75 中間領域と予知の問題

サンタフェ研究所 - 2004/03/27 22:52 -

数学的真理は時間を超えますよ。先の非線形の差分方程式には表向き時間の要素が入りますが、それからカオスを生じさせることができる証明ができたなら、すでに時間は問題ではなくなります。数学的真理は時間の外にあります。

この時間を超えた証明は"Eternal NOW"にあると言っていいでしょう。神が"I AM (ある)"であるように、この数学的真理も永遠のAMです。

さて、今ここで私が恣意的に非線形の差分方程式を与えます。私たちはこの結果を時空間の連続体の中で"経験"することができます。つまり決定論的な定義であるにも関わらずそこから確率論的結果を生むことを"経験"します。しかしこの確率論的"経験"は実は私の恣意によって"決定"されたことなのです。これは時間を超えて証明されてしまっています。

ここでは決定論と確率論を区別することができません。つまり「自律領域」があるか、ないか、決定不可能なのです。

かくしてアルミニアンが「自律領域」の存在を前提に展開されるとすれば、残念ですが、アルミニアンが真か偽かは、決定不能となります。仮にアルミニアンが「自律領域」の存在を仮定して話を進めるのであれば、それはそれとして聞く耳は持ちますが。

つまり「自律領域」は数学で言えば、公理なのです。まあ、これの採否はまさに自由意志によることになりますが。

74 予知の問題 (3)[山谷](#) - 2004/03/27 22:46 -

さて、再建主義は、絶対的予定だけを説いて、人間の自由意志を説かないのだろうか？ どうもそうではないらしいのです。

なぜなら、ある箇所では、

>神は、人間の自由意思を尊重され、各人が自分の運命を選択できるように、御自分の主権を制限された。

・・・と言われており、また他の箇所では、

>歴史のすべてのプロセスはあらかじめ神が定められたことであって、「偶然に起こること」や「神が知らずに起こること」は一切存在しない。

・・・と、言われているからです。

この二つの命題は、一見すると矛盾しているように見えます。「二律背反」です。聖書を読むと、確かに、すべてが予定されているように書かれている箇所もあり、また、人間の自由意志に委ねられているように書かれている箇所もあるのです。ですから、「前提主義」に立った場合には、この「二律背反」を、論理矛盾とは考えないで、むしろ、この「二律背反」をそっくりそのまま受け容れて、この「二律背反」を思考の出発点として、体系を構築しなければならない、ということになるのです。これが、再建主義の立場でありましょう。

これに対して、アルミニアンの場合は、論理的な整合性を求める傾向がありますので、以下の二つの命題：

- (1) 神は神の絶対主権を制限して、人間に自由意志を与えた
 - (2) 神は神の絶対主権によって、歴史のプロセスを完全に決定した
- この二つの命題が衝突する場合には、(1)を採って、(2)を譲らせるのです。これが「予知説」です。

一方、再建主義者は、(1)を採りつつ(2)も採ろうとします。これが「予定説」です。この場合、二律背反になりますが、それについては、「神の矛盾は矛盾ではない」として、二律背反をそのまま受け容れなければならないことになります。

72 予知の問題 (2)

[山谷](#) - 2004/03/27 22:21 -

さて、C.S.ルイスは、「時間の前」ではなく、むしろ「時間の外部」として考えるべきである、と示唆しています。つまり、神は、時間の外部にいます。そうしますと、アダムがエデンの園で禁断の木の実に口をつけた瞬間も、わたしがこうしてパソコンの変換キーを押している瞬間も、再臨のキリストがオリーブ山の山頂に足を触れた瞬間も、古い天地が崩壊して新しい天地が到来する瞬間も、神にとっては「現在」ということになります。

神にとっては、ただ「現在」があるだけであり、神にとっての現在とは、わたしたち人間にとっての「過去・現在・未来」なのです。そうしますと、わたしたち人間にとって「神があらかじめ決定した」という理解は、神にとっては「今この瞬間、決定した」ということになります。

神にとっては、「今、この瞬間、決定した」という、ただそのひとつの単独の行為のなかに、世界の創造・世界の保持・世界への介入・世界への審判・世界の終焉・世界の解消・新世界の創造という、すべてのことがらが入っているのです。

予定と予知と自律の問題を、もし数学的に記述する方法があるとするならば、過去と現在と未来という時間の要素が、いずれもすべて「現在」という解になるような、そういう数式となるのでありましょう。わたしは、数学は大の苦手なので、果たして、そういう記述が出来る数式が、数学界にあるのかどうか、不明にして知りません。

さて、予定と予知の問題ですが、もし、予定説が正しいのであれば、「神は手を加えて、自分が望むとおりのものを得た」のです。
予知説が正しいのであれば、「神はある部分にはあえて手を加えないで、だいたいは望むとおりのものを得たが、意に沿わないところも出た」ということになります。

アルミニアンionの考えでは、この「意に沿わないところ」というのが、永遠の滅びに行く魂が存在する、ということだと考えるわけです。なぜなら、聖書は「神はひとりも滅びることを願わない」と言っているが、その一方で、「永遠の滅びに行く魂が存在する」とも、言っているからです。

では、神は、だれも滅びない宇宙を得たいと思えば、得られなかったのだろうか？

アルミニアンionの考えでは、もし神が、人間に自由意志を与えなかったならば、神はだれも滅びない宇宙を得ることが出来たはずなのです。しかし、アルミニアンionの考えでは、人間とは、神のかたちに似せて作られた、自由意志を持った存在、なのです。ですから、もし、神が人間に自由意志を与えなかったならば、あるいは、自由意志を持たない人間を神が創造したのであれば、それは「神は人間を創造しなかった」ということになるのです。

つまりは、神がだれも滅びない宇宙を創造したとするならば、それは、「人間が存在しない宇宙を創造した」ということになるのです。

そこまで自由意志を重視するのは、自由意志が人間の人格的応答性の根幹を成すものであり、三位一体のアナログアとしての人間にとって、本質的なものであるからです。

そうであるからこそ、全的に墮落して完全に自由意志を喪失した人間に対して、神は介入を行い、「一般恩恵」を与え、「注入された恩恵」を与えることまでして、意思の自由を確保したのだ、ということになります。

71 予知の問題 (1)

[山谷](#) - 2004/03/27 22:20 -

予定と予知をどう考えるかについては、C.S.ルイスが『キリスト教の精髓』の中で述べています。

問題となるのは、わたしたち人間が時空の連続体の中に置かれている存在であるために、すべてのものごとを時間軸に沿ってしか思考することが出来ないということです。
人間の認識能力や思维能力を、究極的には数学的能力に突き詰めることが出来る、とする立場もあるわけですが、仮にその立場に立ってみましょう。そうしますと、この世界内のすべての現象は、何らかの数式によって記述することが可能になります。数式の要素には、時間の要素と、空間の要素が、必ず含まれることになります。

そうしますと、人間の思维能力では、「時間の外部」とか「時間が始まる以前」とか「時間が終焉した以降」については、思考することが出来ない、ということになります。

神による予定と予知についてわたしたちが考えるとき、わたしたちは、何の疑問もなく「世界が創造される前に神が予定あるいは予知した」という命題を立てます。ここに、まったく無意識的に「時間」が忍び込んで来てしまっているのです。世界が時空の連続体であり、時間が、世界の創造と共に開始されたものであるのなら、「世界が創造される前に」というように、時間の前の時間を問うことは、無意味になってしまうのです。世界が創造される前に、時間は

存在しないのですから、世界が創造される「前」などというものは、存在しないことになるのです。

時間の前の時間、あるいは、時間が存在しなかった時点での時間。そういうものを考えようとすると、もうすでに「前」とか「時点」という、時間概念が、わたしたちの思考に、いつのまにか忍び込んで来てしまっていて、わたしたちは、そこから逃れることが出来ません。

予定と予知の問題は、時空の連続体の中でしか思考できないわたしたちが、「時間が生まれる前」について思考するということなのですから、人間の認識能力や思惟能力は数学的能力に限られると仮定するのであれば、そもそも、予定や予知についてわたしたちが考えることは、不可能ということになります。

やっかいなのは、聖書には、「神が予め定めた」とか「神が予め知っていた」という記述が出ていることです。ですから、啓示された命題的真理に基づいて、本来なら人間の思考能力では不可能であろうはずのことを、思考するということになります。それが、予定論であり、予知論でありましょう。

ですから、思考の出発点は、数学ではなく、あくまで、啓示を出発点としなければならないのです。その意味では、「前提主義」ということになりますね。

❑69 自律領域の有無？

サンタフェ研究所 - 2004/03/27 09:26 -

下で言いたかったことは、大尉殿が「自律領域」があるとか、ないとか、もっともらしく説明しておられるが、実は「自律」の定義自体がよく分からなくなっているということです。

010011000111100001111

と時系列と

011010011111001011000

という時系列を比べてください。

前者は何やら規則性がありそうですが、後者はランダムのように見えます。が実は、前者をコインを投げて作ることもできますし、後者を決定論的に作ることもできるのです。「自律領域」なるものは、ある、とも言えるし、ない、とも言えるのです。

❑68 再建主義者の自信の根拠

自由キリスト者 - 2004/03/27 02:07 -

一旦、世の中から見捨てられた非人間的なピューリタンの信仰が、最近になって再び自信を取り戻したのは、やはりニューエージ運動やユニテリアンのものからの影響もあるかもしれません。ニューエージは、「あなたの信じたいことを信じなさい」と言います。これは「汝の意志するところを行なえ」というヒューマニズム宣言と同じですが、実は再建主義もこういったところから自信と力を得ているのかも知れません。「汝の意志するところを行なえ。すべて法とならん」というわけですね。

❑67 再建主義の予定論

自由キリスト者 - 2004/03/27 01:19 -

再建主義の予定論は、ほとんど宿命論ですね。
 これでは、祈っても意味がありません。
 聖書を読めばわかりますが、神は一旦決定されたことを、変更されることがあります。

■66 これって???

サンタフェ研究所 - 2004/03/27 00:45 -

「神はサイコロ遊びをしない（確率論的偶然性の排除）」とはアインシュタインの言葉です。
 しかしですね、Nelsonによれば決定論的ニュートン力学の運動方程式に、ブラウン運動（ホワイトノイズ）で揺動項を入れますとね、シュレーディンガーの波動方程式から得られる結果と同じ結果が導けるのですね。

また非線形の差分方式は決定論的ですが（有名なのは、 $a[n+1]=\lambda(a[n]*(1-a[n])$ など）、実はこれからサイコロなどの確率論的手法で得られる時系列を生み出すことができるのです。これが有名な「複雑系」です。

つまり、決定論的世界観と確率論的世界観の間には何も差がなくなっているのですね。

また量子力学では人間による観測が系に影響を与える、つまり人間の意志が自然状態を変え得ることがあります。意志と自然のかかわりもまたそう単純ではありません。神の意志の領域と人の意志の領域の関わりもですね。

では質問です：全能の神が予知した事実（決定論的世界観）を人間の意志が変える（恣意的あるいは確率論的世界観）ことができるのでしょうか、できないのでしょうか？

再建主義は不可としますね。すると量子力学の観測が系に影響し得ることも世界も否定するわけです。これはハイゼンベルグの不確定性原理を排除することになります。よって位置と運動量が同時に定められることになります。しかし現在それはできていません。ですから再建主義の方に両者を確定し得る観測手法を教えてくださいたいと思います。

アルミニアンは可とするわけですね（でいいのでしょうか？）。そうだとすると神の予知は間違っていたことになります。では予知とはいったい何を言うのでしょうか。例えば先の複雑系ですと、その差分方程式は決定論ですから、結果はすべて予知できるはずですが、実は確率論的になってしまうわけです。つまり予知し得ないのです。もっと言えば「予知」そのものの意味がなくなってしまうのです。

お分かりいただけます、大尉殿？

■65 スーブラプサリアン再建主義の問題点

山谷 - 2004/03/26 22:51 -

墮罪前予定説かつ二重予定説のスーブラプサリアン再建主義によれば、どうやらこの宇宙には「自律の領域は一点も存在しない」ということになりそうです。すなわち、このように言われています。

>歴史のすべてのプロセスはあらかじめ神が定められたことであって、「偶然に起こること」や「神が知らずに起こること」は一切存在しません。

上記の命題を真剣に受け取るならば、この宇宙においては、あらゆる現象が、素粒子ひとつの

動きに至るまで、神によって完全にコントロールされており、「偶然に起きるものは何一つ存在しない」ということになります。これは、完全な「決定論的宇宙」です。

ところで、上記命題が正しいのだとすると、「政治・経済・社会・国家というヒューマニズムの自律的領域を、キリスト者は旧約律法の適用によって支配せよ」と主張する再建主義の政治的アジェンダは、どういうことになるのでしょうか？

神と人間との間に「自律的中間領域」が存在するからこそ、再建主義者は「地を従えよ」と唱えて、キリスト教再建主義の政治活動に邁進しているわけです。

ところが、この宇宙が完全な「決定論的宇宙」であるのなら、宇宙には自律的領域が存在しないことになり、「自律の領域を征服せよ」という再建主義の目標そのものがナンセンスとなってしまいます。

つまり、ウェスレアン・アルミニアンが「天使的中間領域」を持ち出すまでもなく、再建主義者にとっては、そのスーブララプサリアンな宇宙観のゆえに、宇宙には、神の領域も、人間の領域も、中間領域も、何ら本質的に区別がない「絶対恩寵支配領域」となってしまふのです。

ところで、もはや神の領域も、人間の領域も、中間領域も、ある意味ですべて区別が解消されてしまう「絶対恩寵支配領域」が、正しい命題であるとするのなら、再建主義者がその政治的アジェンダを延命させ得る唯一の方法は、次の考え方だけとなるのです。

すなわち、神は、宇宙の現象のすべてを完全に支配しており、そこには、自律の領域は一点も存在しない。そうして、神は、「自律の領域のように見えるが、その実、自律ではないヒューマニズム」を置き、また、「再建主義者」を置き、また、「前千年期再臨論ウェスレアン・アルミニアン」を置いたのです。

そうして、歴史が「再建主義者がその政治的アジェンダを達成した」という結果に至るのであれば、それは、再建主義が自律の領域を征服したのではなく、ただ、「神が絶対的支配を行使した」ということなのです。

しかしまた、歴史が「前千年期再臨論ウェスレアン・アルミニアンが再建主義を完全論駁して葬り去った」という結果に至ったのであれば、それは、ウェスレアン・アルミニアンが再建主義を打倒したのではなく、ただ、「神が絶対的支配を行使した」ということなのです。

ここにおいて、もはや、歴史がどのような方向に進もうとも、また、再建主義が勝利しようとも、敗北して歴史から完全に姿を消そうとも、つまり、結局のところ、再建主義がどうなるうとも、「神の絶対的な支配が行使された」ということになるのです。

■ 64 感想を。

内なる人 - 2004/03/26 22:50 -

詳しい説明ありがとうございます。正直アルミニウス神学のついてカルヴァン主義の目からしか見てこなかったので興味深かったです。

ひとつ感想を。アルミニアンの人達は全ての人は本来全的墮落をしているけれど神様の恩恵により救いを拒否するか受け入れるかの状態に全ての人がなっていると考えているということでしょうか？

□63 内なる人さまへ

山谷 - 2004/03/26 21:46 -

アルミニウス神学を理解する鍵は、恩恵論だと思います。

一般に思われているのに反して、アルミニアンも、アダムの墮罪による「人間の全的墮落」(total depravity) を信じています。全的墮落ですから、人間の全人格における墮落、つまり、理性・感情・意志という、全存在に墮落の影響が及んでいて、神が意図された本来的な人間の在り方から、脱線してしまっている、と考えます。

もし、神が、このような、全的に墮落した人間を、そのまま放置されたならば、人間は、自滅するほかなかったでしょう。

しかし、カルヴァンによれば、神は、全的に墮落した人類に対して、一般恩恵を与え、人間が秩序ある安寧な社会生活を営むことが出来るよう、保障しました。この「一般恩恵」には、自然法や良心といったものがあります。また、罪によって損なわれた人間の理性能力や認識能力や思惟能力を助けるために、アプリーオリ（先験的）に与えられている恩恵も含まれています。

カルヴァンは、このような一般恩恵は、人間が秩序ある安寧な社会生活を営むことを可能にするけれども、救いに導くことにはない、としました。それゆえ、カルヴァンの用語によれば、一般恩恵とは、キリストの限定的贖罪によって、救いの対象から漏れた「非選民」のために与えられた恩恵、ということになります。

アルミニアンも、一般恩恵については、カルヴァンと同じ考え方をしています。しかし、ただ一点違うのは、アルミニアンは、キリストの贖罪の効力が非限定であると考えますので、一般恩恵は救いの対象から漏れた非選民だけのためのものではなくて、すべての人間に普遍的に与えられる恩恵であると考えます。

さて、一般恩恵だけでは、人はキリストの救いに与ることが出来ません。そこで、神は人を救うために、聖霊による特別な召命を与えます。これを、カルヴァンの用語では、有効召命と言います。

聖霊の働きかけを受けた人間は、神の恵みによって回心させられ、キリストを主と告白する信仰を受けられます。このような聖霊の働きを、アルミニアンの場合は、回心に先立って働く恩恵という意味で「先行的恩恵」(prevenient grace)と言います。

しかし、この先に、カルヴァン派とアルミニアンとの見解が大きく異なる点が出てくるのです。

カルヴァンの場合は、聖霊の働きかけを受けた人間は、その働きかけに対して抵抗することが出来ず、不可避免的に回心させられる、と考えます。これを「不可抗的恩恵」(irresistible grace)と呼びます。

これに対して、アルミニアンの場合は、聖霊の働きかけを受けた人間は、神の恵みを注入された自分の意志によって、働きかけを受け容れることも出来るし、また、働きかけを拒否することも出来る、と考えます。これを「注入された恩恵」(imputed grace)と呼びます。つまり、人間の意志は、全的に墮落してしまっているので、救いを選び取ることも、救いを拒否することも不可能な状態にまで陥っているけれども、神の恩恵が墮落した意志に注入されることによって、救いを拒否することが出来るという一点において、意志の自由が回復されると考えるのです。

ウェスレーによれば、ウェスレアン・アルミニアン神学とカルヴァン神学の相違は、「その一点」だけだ、と言うのです。ですから、ウェスレアン・アルミニアンとカルヴァンの間には

「間一髪の差しかない」と、ウェスレーはよく言いました。

以上をふまえますと、「内なる人」さまの次の質問：

>アルミニアンの人達は自分が救われるのは自分の意志でできると考えているのでしょうか？

・・・については、こういう答えになります。

「人間は全的に墮落しているので、自分の意志で救われることは絶対に不可能である。神からの恩恵を与えられなければ、だれも信仰を持つことは出来ない」

そうして、第二番目の質問：

>自分が救われたのは神様のおかげだが現在不信仰な人達が存在するのはその人達が罪深く信じないからだと考えるのでしょうか？つまり人が信じるのは神様のおかげだが信じないのは人間のせいだと。

・・・については、こういう答えになります。

「人が信じるのは、神の恩恵によらなければ、不可能である。また、それとまったく同じように、人が信じないのも（つまり、提供された救いを拒否することも）神の恩恵によらなければ、不可能である。」

☐ 62 アルミニウス神学について

内なる人 - 2004/03/26 00:49 -

初めまして。アルミニウス神学を知りたくて投稿しました。救いについてお尋ねします。

アルミニアンの人達は自分が救われるのは自分の意志でできると考えているのでしょうか？

それとも信仰さえも神様の恵みだと考えているのでしょうか？つまりすべては神様のおかげだと。

もしくは自分が救われたのは神様のおかげだが現在不信仰な人達が存在するのはその人達が罪深く信じないからだと考えるのでしょうか？つまり人が信じるのは神様のおかげだが信じないのは人間のせいだと。

ウェスレー・アルミニウス主義者が救いについてどう考えているか知りたくて投稿しました。

ちなみに私は穏健なカルヴァン主義とカルヴァン主義の中間に立っている者です。

[「再建主義大論争を回顧する」へ](#)